

# 宮崎県西米良村の人口減少対応策の成果と課題

中 島 正 博

## はじめに

地方創生が焦眉の課題になっている。人口の高齢化と少子化が進み、人口減少自治体、「消滅自治体」の危機が迫っている。しかし、地方創生のためには、まずもって、少子化の背景である子どもを産み、育てる環境づくりをすることで、あるいは、そもそものところである地域で産業を振興し、雇用を維持し、生活できる地域をつくる必要がある。そのことで、ミクロレベルでは人口減少の勢いを緩和したり、歯止めをかけたりすることができる。

そこで、本稿では、「消滅自治体」とされるなかでも、10年以上にわたり地域振興と人口対策を行ってきた宮崎県西米良村を事例に、雇用確保を含んだ定住政策の視点から行われた行政の取組みについて成果と課題を考えることとした。

西米良村は、宮崎県の中西部、熊本県との県境に位置し、総面積 271.56 平方キロメートルのうち 96% は山林が占める山村である。人口は 1241 人（2010 年 10 月国勢調査）であり、そのうち 65 歳以上が 515 人（41.5%）いる。昭和 30 年代は林業・木炭生産の最盛期だったが、社会情勢の変化や林業の衰退により急激に人口が減少したものの、平成に入り人口は微減となっている。それは、10 数年の取組みの伝統をもつワーキングホリデーや、温泉観光施設「ゆたーと」の経営、おがわ作小屋村の運営などで Uターン者が、それなりにいるからである。

なお、西米良村は、地形的に見れば、いわゆる「行き止まり」の山村ではない。熊本県人吉市と宮崎県西都市を結ぶ国道 219 号（米良街道。日肥線という国鉄バス路線もあった）が村を横断し、中心部の村所（むらしょ）で南北を縦断する国道 265 号線（宮崎県小林市と熊本県阿蘇までつなぐ）と交差する交通の要衝であり、宿場としての賑わいもあっ

図 1 宮崎県西米良村



出所：西米良村【1996】から作成。

た。また、廃藩置県にあたって、当時の藩主だった菊池則忠<sup>1)</sup>は領民に山林を与え、弘文館という学校を建て、教育を広めたという歴史あるまちである。

## 1. 西米良村の人口動向と予測

現代日本において、少子高齢社会と人口減少社会は避けられないものとなっているが、これについて警鐘が鳴らされたのはそう昔のことではない。1.57ショック<sup>2)</sup>をうけて、1994年のエンゼルプランなど少子化対策はその端緒を見せているが、すぐに、本格的な動きがはじまったわけではない。

1997年10月に、人口問題審議会が「少子化に関する基本的考え方について」<sup>3)</sup>を発表し、少子化・人口減少に対して公的な施策を講じるべきかなどの原理的な問題に立ち返って少子化がもたらす人口減少社会への対応のあり方等についての様々な論点や考え方を整理した。同年、人口問題研究所が、1995年国勢調査結果をうけての将来人口推計を発表した。それによると、1995年国勢調査の人口1億2557万人が中位推計では2007年に1億2778万人のピークとなった後に人口減少局面にはいるとされた。こうして人口問題、人口減少問題への対応が政策課題となり、2003年の少子化社会対策基本法に結実する。

もっとも、これは平均であって、地域によって人口動態は異なる。いわゆる過疎地域にあっては、人口のピークは昭和30年代にあり、以後、人口減少局面が続いている。

そんな過疎地域の一つに、宮崎県西米良村がある。当時の人口は約1500人。1997年の試算では2025年には718人に減少することと予測されていた。

同村は宮崎県の中西部、熊本県境に位置する山間部の村である。昭和30年代には林業や薪炭で栄えていた。人口の流入もあったようだが、一方で、林業の低迷と、エネルギー革命が始まる。林業関係産業の従事者は高齢化するにつれ生活困難に至る。1980年の生活保護率は38・1%と、県平均の17・9%の2倍になっていたという<sup>4)</sup>。

たしかに表1で見ると、かつては林業の村であり、就業者人口の半数を林業で占めていた。過疎地域の多くは、工場の誘致による製造業の活性化をめざしたり、公共事業（建設業）を基幹産業としたりすることとなるが、西米良村はその地形的な特徴から第二次産業への移行

---

1) 「すべからく浩然の気を養い、すべからく天下の魁となるべし」とする「菊池の教え」の精神や礼節を重んじ、文武に励み、困窮に耐え、そして郷土・社会・国家を想うところは今なお、村民の心の中に息づいているとされる（西米良村【2011】44ページ）なお、菊池則忠の孫にあたる菊池武夫は、亜細亜大学の前身となる興亜専門学校の校長に就任している（1941年）。

2) 1990年、厚生省によって、合計特殊出生率が過去最低の1.57となったことが発表された。それ以前の最低記録は迷信に基づく1966年の「丙午（ひのえうま）」であった。

3) <http://www.ipss.go.jp/publication/j/shiryu/no.13/data/shiryu/souron/27.pdf>

4) 前田【2004】46ページ。

する条件はなかった。それでも、林業の代替としてシイタケ栽培が行われ、村の特産品の一つになっている。

表1 主な産業従事者別 15歳以上就業者人口の推移

単位：人，%

	1960年	1970年	1980年	1990年	2000年	2010年
総数	2,620 (100.0)	1,754 (100.0)	1,213 (100.0)	985 (100.0)	836 (100.0)	638 (100.0)
農業	607 (23.2)	508 (29.0)	355 (29.3)	240 (24.4)	157 (18.8)	150 (23.5)
林業	1,253 (47.8)	473 (27.0)	191 (15.8)	160 (16.3)	70 (8.4)	
建設業	135 (5.2)	228 (13.0)	161 (13.3)	141 (14.3)	124 (14.8)	101 (15.8)
製造業	48 (1.8)	51 (2.9)	79 (6.5)	73 (7.4)	44 (5.3)	27 (4.2)
卸売小売	157 (6.0)	145 (8.3)	104 (8.6)	85 (8.6)	79 (9.4)	44 (6.9)
運輸通信業	58 (2.2)	33 (1.9)	41 (3.4)	28 (2.8)	26 (3.1)	12 (1.9)
サービス業	211 (8.1)	225 (12.8)	191 (15.7)	180 (18.3)	249 (29.8)	239 (37.5)
公務	60 (2.2)	65 (2.4)	72 (5.9)	66 (6.7)	80 (9.6)	59 (9.2)

注：少数の就業者しかない産業は省略した。下段（）は構成比。

出所：各年の国勢調査から作成。

西米良村は、人口問題研究所の人口減少試算発表前から人口減少が進んでいる現状を直視し、検討を行い、実施中の第3期長期総合計画を大胆に見直し、1996年からの後期計画を「生涯現役元気村 カリコボーズの休暇村・米良の庄 わくわくプラン（以下、わくわくプラン）」として立案する中で、村づくりの概念を転換させる。

「わくわくプラン」の基本コンセプトは3点ある。1つ目は「豊かな自然に抱かれたやすらぎの村」。「カリコボーズ」をイメージキャラクターとして、一ツ瀬川源流、米良の庄といった先祖から引き継ぎ、未来へ引き渡すべき豊かな自然をいかした村づくりである。2つ目は「全村民が生涯現役」であり、健康で長生きして、現役として社会に参加する村づくりをめざす。村には古くから相互扶助のしくみとして「てごり<sup>5)</sup>」の風習があり、集落や地域コミュニティの基礎として今なお続いている。3つ目は「全村が休暇村」。村外から多くの交流人口を迎え入れ、村内いたるところで交流の華が咲き、双方が笑顔で暮らせる村づくり、をめざしていた。

要するに、「わくわくプラン」では「交流人口対策・観光振興・集落振興・定住施策」を目

5) 現在のように農機具等が十分でなかった時代に、農作業等において、季節的、一時的に労働力が不足する際に、労働力を相互に交換し補う「相互扶助制度」「助け合い」の意味。西米良村【2011】28ページ

玉にして、観光で雇用を吸収しようとしたのである。温泉を掘削し、1996年に湧出した。さらに、97年からワーキングホリデー制度を試行、翌年から本格実施した。その結果、若干の人口移入があった。1000人余りの村であるので、何人かであっても、人口推計に影響する。2000年の国勢調査人口をもとに将来人口を試算すると、西米良村は2030年には人口が2511人へと急上昇することとなった<sup>6)</sup>。もっともこの試算は、90年代後半の人口移動がこの先も続くことが前提である。2010年国勢調査人口をもとに試算してみると、西米良村の人口は2010年が1241人であるが、2040年には668人に減少することとなる。人口減少対応策としての、経済振興や雇用確保をふくめた定住政策を継続し、その成果のペースを維持することが求められている。

いずれにせよ、これまでの経過から、産業振興や定住施策如何で人口動態は変わりうるのである。村資料によると、2010年以降の人口動態を加味して試算すると、人口総数は減少するものの1000人程度にはおさまるといえる。

## 2. 「わくわくプラン」以降の西米良村長期総合計画

西米良村は、「わくわくプラン」の目標として「米良の庄建設プロジェクト」を掲げ、8つの庄の構想を打ち上げた。8つの庄ごとに、集落振興を行おうというものである。具体的には図1、表2のようなプロジェクトが構想された。村には8つの集落があるが、最低1つのプロジェクトがそれぞれに割り振られている。

西米良村は、明治の町村制にあたり、旧米良山14村を東西に分けたうちの西部7か村からなり（東側は、東米良村＝1962年に西都市に合併と、木城町の一部となっている）、昭和の合併に際しても、平成の合併に際しても合併はしなかった。1970年代に、横野、尾股<sup>7)</sup>、板谷、上米良の各小学校が閉校、1989年に小川小・中学校、2005年に越野尾小学校が閉校し、村内には役所周辺の村所にある小中学校1校となった。小学校の閉校とともに、各集落の人口減少はいっそうの拍車がかかった。村所地区は約500人、他の地区は数十人から100人の人口である。

村長の黒木定藏は、ヒアリングに対して「全村が休暇村というのは、宿泊施設だけが活性化しても意味はない。それぞれの地区で集落が主体的に行う「村民総参加のシステム」が大切なのです。今では、土日にはどこかの集落で、なにがしかのイベントが行われるようになっています。同じものをつくったら、利便性のあるところに負ける。だから、訪れた人の心をうつ「本物」

6) 前田【2004】18ページ。原典は、日本統計協会『市町村の将来人口』2002年3月。

7) 尾股小学校は中学校併設。山林経営企業の社宅向けの学校である。最盛期には60人の児童がいたようだが、1978年に中学校とも閉校している。山林経営企業は、戦前から周辺の山林を買い、製材工場もつくり、尾股地区は栄えた。「しかし昭和30年代になると徐々に尾股の人口が減り始める。33年には75世帯320人だったのが37年には38世帯138人まで減少した（原典は、西米良村『西米良村史』1973年。568-570ページ）。現在尾股は再び無人の山となっている」本田佳奈【2008】167ページ。

表2 西米良村の8つの庄づくり（「わくわくプラン」）

	基本的施策の大綱	米良の庄建設プロジェクト
子孫に引き継ぐ 快適村づくり	土地の有効利用、交通ネットワークの整備、公共交通機関の確保、情報ネットワークの整備、交通安全対策、大切な資源河川の美化、安全な水質水道の整備、生活排水対策、安全な生活の確保、環境の保全と美化、活力ある街づくり計画	街づくり 鶴地区特定環境保全
生きがいのある 長寿村づくり	児童福祉・母（父）子福祉の充実、心身障害者福祉の充実、高齢者福祉充実、社会保障制度の充実、医療の充実、生涯健康づくりの充実	健康づくりの庄 カリコボーズの温泉館建設 健康管理センター建設
ふるさとの香り 溢れる文化村づくり	家庭教育と幼児教育の充実、将来を託す学校ふるさと教育、社会教育と生涯学習、スポーツ・レクリエーション振興、文化・芸術の創造	湖遊びの庄 湖の家建設 語り部の庄 小川城址公園整備 民話の里建設
生涯現役元気村 づくり	高付加価値化新しい農業の振興、森林の総合管理を図る林業の振興、地域の特性を生かした水産業の振興、活力ある商工業の振興、産業観光・レクリエーションの振興、総合産業の展開、労働環境の整備促進	花づくりの庄 天包高原周辺整備 川遊びの庄 ヤマメの里づくり 物づくりの庄 特産品加工所建設 木製品加工所建設 泊まりの庄 双子キャンプ場建設 米良の里の整備

出所：前田【2004】65ページ。

表3 長期総合計画の流れ

計 画	期 間	状 況
第1次長期総合計画	1972年～1981年	<低迷期>
第2次長期総合計画	1982年～1990年	人口流出・高齢化・産業低迷
第3次長期総合計画	1991年～2000年	地場産業振興、生活基盤整備
わくわくプラン (第3次長期総合計画 の見直し)	1996年～2000年	<転換期> ※新しいコンセプトによる村づくり 交流人口対策・観光振興・集落振興・定住施策 ワーキングホリデー、観光施設整備、生涯現役元気村、都市間交流、作小屋村づくり構想……
第4次長期総合計画	2001年～2010年	
第5次長期総合計画	2011年～2020年	<第2次転換期> 交流人口対策・観光振興・集落振興・定住施策の継続・強化 新たな村の在り方の見直し（人口対策）

出所：西米良村提供資料。

でなければならないし、そのためには自分たち自身が好きでなければならない」と語っている。

たとえば、古くからの商家町ではまちおこしとして「ひな人形」を展示するイベントを行っていることが多い。西米良村でも「カリコボーズのひなまつり」というイベントとして取り組まれている。豪農や豪商は少ないので、創作人形を展示している人もいるようである。

いずれにせよ、こうして「わくわくプラン」が動き出した。村役場資料（表3）によると、「わ

くわくプラン」以降「転換期」に入ったとされる。

まず、取り組まれたのが、「花づくりの庄」である。天包山（竹原地区）を中心とした花卉団地の整備を核とした農業振興である。西米良村は急峻な山地が多く、平野部は少ないデメリットを逆転し、山地はむしろ寒暖の差が激しいことから花卉園芸を選択し、立案当時は将来的には観光客の誘致も視野に入れていた。天包山の花卉団地は1995年に整備され、ここにUターンしてきた若者も入植した<sup>8)</sup>。当初はピオラやパンジーの作付けが行われていたが、花卉の価格低迷で、現在では、開発した農地ではカラーピーマン生産が行われている。カラーピーマンは西都市も産地だが、気温の関係で夏秋には品質になるために標高の高いことをいかして西米良村で耕作を行っているのである（8戸の農家が1.87ヘクタールで耕作している）。2010年の農産品の主力販売産品は、カラーピーマン4587万円、柚子2638万円、畜産2193万円、シイタケ1392万円となっており、カラーピーマンが「稼ぎ頭」なのである<sup>9)</sup>。

花卉栽培の主力産品としては、ほおずきもある。野山の自生しているほおずきを園芸化したもので、ほおずきの中にあかりをいれてライトアップするというイベントも行われている。

また、柚子は、1970年代から栽培が始まり、村内にある加工工場（有限会社米良食品）で、柚子味噌、柚子ようかん、柚子こしょうなどの特産品として加工している。ピーク時には約30ヘクタールで生産されたが、傾斜地であり、作業道も未整備のうえに、生産農家の高齢化があり、生産量は半分以下になった。そこで、村は雇用対策を兼ねて5ヘクタールのユズ園を整備した。20～30代の3人が2009年度から順次入植し、計4000本を管理している。ユズは植えてから初出荷まで5年余りを要するので、収入のない間、村は3人を嘱託職員として雇っている。本格生産が始まれば、それぞれ独立する予定だという。

子牛を繁殖し肥育農家に売る畜産も相当の生産額がある。最近では、上米良地区では、「ジビエ」の特産品化に取り組んでいる。

米良の庄建設プロジェクトの「健康の庄」としては、村所地区に掘削した温泉「ゆたーと」の経営が続けられている。

経営がユニークなところは、朝風呂会と夕風呂会というボランティア組織があることである。「ゆたーと」の朝は住民ボランティアの清掃で始まる。20～80代の59人が参加する「朝・夕風呂会」。村の呼びかけで結成され、従業員も加えた曜日別の班がある。朝は清掃後に風呂に入れるのが「報酬」だ。土曜の朝を担当する男性3人は、午前5時半からおけや椅子を洗い、タオルで拭き上げる。その一人は開業以来、通いつけているという<sup>10)</sup>。朝風呂会は高齢者に対して、夕風呂会は営業時間後の清掃であり、これは若者が担当している。

「ゆたーと」には食堂が併設されている。食堂や土産物は村内の農産物や加工品が並ぶ。食

---

8) 前田【2004】67ページ。

9) 西米良村【2012】から。原典はJA西都西米良支所調べ。

10) 西日本新聞2014年7月19日付。

堂のオススメは、村内で養殖に成功した「西米良サーモン」の料理である。

「ゆたーと」の運営を行っているのは、第三セクター「米良の庄」である。「わくわくプラン」では、「総合産業の展開」という節がたてられ、一次、二次、三次産業を総合的に展開する総合産業事業起しの主体として第三セクター「米良の庄」が位置づけられていた。1000万円は村出資で、商工会、JA、森林組合、米良食品、漁協が、各5万円出資しているの、村の出資比率は98%になる。

現在では、双子キャンプ場の運営を森林組合から受けたり、高齢化で廃業したプロパンガスの販売業も行ったりしている。年商1億5000万円ほどで31人の雇用をしている。

2001年からの「西米良村第4次長期総合計画」では、「わくわくプラン」の取組みを発展させ、「菊池氏の薫陶 生涯現役元気村 カリコボーズの休暇村・米良の庄」をキャッチフレーズに、8つの庄建設プロジェクトが6つの施策の大綱とマトリックスを描くように整理される(表4)。

川遊びの庄として、「川の駅」整備構想がはじまる。日本一の本造車道橋の橋詰に「川の駅」を整備し、西米良村の様々な産物(菜)、作る、売る、食べる店(屋)、という意味を込める「百菜屋」を整備する。「百菜」は「百歳」にも通じるという。過疎債と国庫補助事業(地域間交流施設整備事業)を活用し、2005年に完成、夏にオープンした。食堂部門と野菜等の直売部門合わせて、1800万円程度の売り上げとなっている<sup>11)</sup>。

運営は、交流の仕掛け・新しい自立の仕組みづくりを目的に、みどりグループ<sup>12)</sup>などの特産品のグループ、営農グループ、JA女性部<sup>13)</sup>など11の女性グループが共同体として「倶楽部百菜屋」が行っている。164人が登録し、食堂部門を中心に35人くらいがシフトを組んで働いている(常時4人は詰めている)。お給料がでるので、年金以外のちょうどよい現金収入となっている。従業員のお母さんに聞いたところ「無理しない範囲で働けるし、忙しいことは元気の証拠である」そうだ。

食堂部門の食材はできるだけ村内のものを使い、「しいたけ南蛮定食」という名物料理も考案された(5節で後述するが、宮崎市内のふるさと料理店の「指導」をうけたという)。また、カゴ販売といわれる物販は、しいたけや野菜のほか工芸品も販売される。売上の2割が手数料として、百菜屋の収入となる(このほか、指定管理料が年間300万円ある)。

11) 以下は、百菜屋でのヒアリングによる。ヒアリングに応じていただいた後藤熊作支配人と、同席いただいた農林振興課の河野見教課長補佐、中武麻依主事にも、この場を借りてあらためてお礼申し上げる。

12) みどりグループは、1964年にクスギの苗を共同販売したどんぐりクラブが前身。1970年に緑の野菜を食生活にいれようとみどりグループと改名。地こんにゃく、糸巻大根の試作など、「腹の底から笑おうや」をモットーに活動を続けている。平均年齢80歳。<http://www.chusankan.net/blog/nishimera/archives/2009/08/post-5.html>

13) JA女性部は、保育園で年長組さんと村内の高齢者が一緒にお絵かき・折り紙・ゲームをした後、昼食をとり、交流を深める「世代間交流事業」を行っているほか、20年間老人宅配弁当を作っているという。<http://www.chusankan.net/blog/nishimera/archives/2011/03/post-91.html>

なお、宮崎県は小規模町村に県職員を派遣する取組みを行っており、参照したのは2009～2011年度に西米良村に派遣された職員のブログである(前注も同じ)。

表4 第4次総合計画にみる、施策の大綱と8つの庄建設プロジェクト

施策の大綱 8つの庄	新世紀を担 う豊かな人 づくり	活力ある元 気産業づく り	住みたくな る村づくり	生きがいの ある安らぎ の村づくり	山村文化の 薫る村づく り	新たな共生 を図る豊潤 な森づくり
街づくりの 庄		街並みの再 編等	定住環境の 整備等	高齢者住宅 の整備等		土地の有効 活用と環境 の保全・修 景等
健康づくり の庄		「ゆたーと」 の充実等		日々健康管 理の仕組み づくり等	「ゆたーと」 の拡充（郷 土料理の継 承）	「森林浴の 森」の整備
湖遊びの庄		「湖の幸」 の研究開発 等				湖面の有効 活用
語り部の庄	小川城址公 園等の拡充	体験農場整 備等			民話館・資 料館の充実 等	
花づくりの 庄屋		花卉等の基 盤整備等				天包高原の 整備
川遊びの庄		ヤマメの里 づくり等	河川水浴場 の整備等			滝と泉巡り プログラム 整備等
匠の庄	ものづくり 支援	「匠の家」 整備等				
交流・滞在 の庄	「森寿の宿」 の整備	民間宿泊施 設の充実等			「森寿の宿」 の整備	

出所：西米良村【2001】から作成。

ここまで「わくわくプラン」と、第四次長期総合計画にもとづいて、米良の庄建設プロジェクトを見てきた。施設は行政が建てるが、運用は村民がグループをつくって自主的自治的に運営することが特徴となっている。

### 3. ワーキングホリデー制度の導入と運用

こうして、1990年代半ば以降西米良村では、交流人口拡大の模索が始まった。

交流人口促進のために取り組み始めたのが、8つの庄全体を通して利用できる仕組みとして導入された、日本初のワーキングホリデー制度である。「都市住民における、あまり費用をかけずに手ごたえのある旅行をしたいというニーズと、一時的に不足する労働力を補いたいという地元の要望を結び付け、それらの宿泊拠点として、遊休施設化している宿泊施設の稼働率アッ



ブを図る、という3つの期待から発想されたものである<sup>14)</sup>」。

1997年の試行段階では、受け入れ農家の説得とともに、参加者をどう募るかという障害があった<sup>15)</sup>。後者は、ふるさと村民720人にダイレクトメールを送ったものの、芳しい成果はなかったが、マスコミ（宮崎日日新聞97年9月4日付）に取り上げられることで全国的な反響となった。試行期間の参加者は29人で、「移動用の自転車がほしい」などの要望がアンケート調査の結果改善され、1998年から本格実施した。

ワーキングホリデー制度は、①西米良に少しでも長く滞在できる、②西米良のよさを知ってもらい、ファンになってもらう、③この制度を通じて西米良を発信する、④将来的には不足する働き手の確保までならむ、ことをねらいとしている<sup>16)</sup>。受け入れに数は、3日から1週間程度とし、双子キャンプ場などの宿泊施設に泊まり（ワーキングホリデー参加者には割引料金がある）、受け入れ農家の女性に負担がかからないように民泊は行わない。受け入れの窓口は「米良の庄」である（職業紹介になってしまうので、連絡調整のみを行い、参加者と受け入れ農家等の直接契約になる）。

ところがふたをあけてみると、若い女性の参加が多かった。受け入れた農家自らが参加者と結婚した例もある。「米良の庄」によると、2013年までの実数401人のうち、男性138人に対し女性は263人とほぼ3分の2である。しかも、20代が半数弱の182人である。出身地別にみると、宮崎県が188人と約半分（47%）をしめ、その他の九州が97人（24%）さらに残りの半分は、関東・東海、関西で91人（23%）である。平均滞在日数は5.4日。定住につながったケースも2人いるという。

ワーキングホリデーは、「経済的には厳しいが、豊かな自然環境の中で、その幸を複合的に利用し、濃密なコミュニティの中で、訪れた人とも暖かな交流を楽しみながら暮らす、西米良村の生活の良さ・楽しさを日々感じることが出来る村づくり<sup>17)</sup>」となった。そして、この取

14) 前田【2004】79ページ。また、同書114ページには、計画段階で構想した日本型ワーキングホリデーの活動モデルとして、例えば、夫婦2人で1週間（6泊7日）滞在し、そのうち3日柚子もぎ採りや花の鉢上げなどを手伝い、4日ホリデーを楽しんだとするケースが取り上げられている。賃金は時間600円（当時の宮崎県の最低賃金）、1日7時間労働であるから1人1日4200円の収入になる。2人で8400円。3日働くと2万5200円。一方、滞在費は双子キャンプ場のコテージ（簡単な自炊設備がついている）で、ワーキングホリデー参加者の場合は何人（といっても最大5～6人くらいであるが）泊まっても1棟3000円である。つまり、3日仕事をするによって費用を殆どかけずに滞在でき、農家側が支払った賃金もすべて地元へ還元され、その間情報交換もでき、かつ村営宿舎の稼働率アップにも繋がることになる、とされていた。

15) 田爪【2007】によると、「高齢社会をにらんだ「シルバーワーキングビレッジ」構想が交流の仕組みとして考えられてきたが、「こんなことで本当に人が来てくれるのか」との疑問が上がり、なかなかスタートできなかった」。また、「人を雇用し報酬を支払うため、職業安定法や労働基準法規定のクリアも必要となった」り、「報酬に見合う仕事ができるのかなど意見が」でたりしたという。

16) 以下の記述は、「米良の庄」でのヒアリングと提供資料による。ヒアリングに応じていただいた黒木竜二総務課長に、この場を借りて改めてお礼申しあげる。

17) 前田【2004】118ページ

り組みは、もう一つの効果を生んだ。「地方の誇りと活性化を取り戻すことである」。「人口が激減し、ともすれば自信を失いかけていた。しかし、ワーキングホリデーで来てくれた人数は少ないものの、楽しそうに仕事を手伝ってくれ、しかも何度も来て「素晴らしいところですね」といってくれる利用者の言葉は、心の過疎を吹き飛ばしてくれる<sup>18)</sup>。そう感じるためには、受け入れる側も楽しまないといけない。受け入れる側と参加者がウィンウィンの関係になっている。

西米良村のワーキングホリデーは、当時は日本初の制度として注目を集めたが、近年では参加者が1ヶタになることも少なくないという。そもそも8つの庄を横断するものとして、どの集落のプロジェクトでも利活用可能なものとして構想されてはいた。しかし、受け入れる農家等は限られている(6戸(カラーピーマン3, 花1, 柚子1, 柚子加工1)。給与を払うためにも農繁期でないと受け入れができないので、年間の受け入れは30~40人程度が限度だという)。最近の参加希望者からは、受け入れ期間の長期化や、農業体験全般をしたいという希望が増えてきている。受け入れ農家を増やすことがその対策になるが、あくまで受け入れ側が無理をしないこと、受け入れ側の自発的な受け入れが望ましいとされているので、農家しだいのところがある。

それでも、ワーキングホリデーの参加者がリピーターとなったり(受け入れ先と直接コンタクトをとるため米良の庄が把握できないケースも多い)、「友達を連れて来たり、夏の花火大会や冬の夜神楽など各種のイベントにも参加してくれる<sup>19)</sup>」ようになった。

こうして「心の過疎を吹き飛ばした」事例が、集落ごとに、自分でも行わなければという気がまえを生む。その事例として、小川地区のおがわ作小屋村の事例を5節で紹介することになるが、その前に、90年代以降の西米良村の定住政策とその成果について見ておきたい。

#### 4. 定住政策

西米良村資料によると、U・Iターン者の動向は表5のとおりである。住民基本台帳での異動を集計したもので、小・中学校の教職員や駐在所の警察官はカウントしないで集計したようであるが、すでに、このうちには転出者もいる。他地域と比べてもUターン者が多い印象がある。

岡崎ら【2004】では、U・Iターン者41人を対象に34人の協力を得たアンケートをもとにその要因を分析している。

それによると、転入理由は「家族・親せきがいる」(69%)と「就職口があった」(43%)が主な理由である。さらに「自身の転入理由に影響を与えたもの」を聞き、「村民の交流・活動」「伝統文化」の要因があると結論付けている。なお、「行政の働きによって生活環境が整備され

---

18) 前田【2004】121~122ページ。

19) 田爪【2007】。

表5 U・Iターン者の状況

単位：人

	性別		年代別						ターン別		年度 合計	現状	
	男	女	10歳代	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代 以上	I	U		定住	転出
2003年度	10	11	2	6	2	3	5	3	6	15	21	14	7
2004	8	11	2	10	3	2	0	2	9	10	19	9	10
2005	13	18	1	13	9	2	5	1	12	19	31	16	15
2006	15	14	2	7	8	5	5	2	11	18	29	16	13
2007	16	16	2	12	10	2	2	4	11	21	32	18	14
2008	11	10	3	5	4	1	4	4	4	17	21	12	9
2009	19	14	1	11	8	3	5	5	16	17	33	26	7
2010	17	11	2	12	4	2	3	5	19	9	28	15	13
2011	9	6	2	8	0	2	2	1	7	8	15	10	5
2012	10	10	0	9	3	0	2	6	5	15	20	14	6
2013	6	18	1	13	4	1	2	3	13	11	24	22	2
合計	134	139	18	106	55	23	35	36	113	160	273	172	101

注：教職員や警察官など定期的な異動のある者を除く。複数回の出入りがある場合は初回年度でカウント。現在死亡者も定住者には含む。

出所：西米良村提供資料による。

た」は選択者がいなかったという。

これらの4つの要因と転入時期との関係とを調べたところ、「家族・親せき」や「交流」は従来からあったものの、1995年に第三セクター「米良の庄」が本格始動した後の1997年頃から「就職口」が増えてきて、2000年頃からは「伝統文化」の要因をあげる者が増えており、2003年頃からは、4つすべての要因をあげる者が増えているという。「村民の交流・活動」や「伝統文化」などその土地にもともと存在するものを見直し、自治体内外で共有する方法も検討すべきであると考えられる」と岡崎らは結論している。

たしかに、西日本新聞の連載記事のなかで、移住者（22歳の保育所職員）へのインタビューがあるが、「自然いっぱい子どもに目が行き届く。こんなところで働きたかった」とともに、「働き始めると、保護者がよその子どもでも関係なく褒めたり叱ったりするのに気付いた。地域ぐるみで見守っているぬくもりを感じる。参観日には夫婦そろって参加する姿も目立つ。「お父さんが作った」という弁当を持ってくる子ども。村は共働きがほとんどで、家事や子育てに積極的な男性が多い」という<sup>20)</sup>。「てごり」の文化が生きているのである。

20) 西日本新聞2004年7月17日付。

西米良村では、若夫婦に母屋を譲るという作小屋の文化（注27参考）がある。とはいえ、住宅の整備は必要であろう。雇用先があり、U・Iターンの若者が村に来たときに住むところの確保が必要である。そうでなくても山村の西米良村では、居住可能な土地は限られている。西米良でも定住住宅の整備を行った。その効果について役場担当者は以下のように述べている。

「平成4年に特別養護老人ホームが新設。平成7年には第三セクター「米良の庄」が設立されたほか、既設の役場・農協・森林組合などに村外からの若年の就職が増加した。

しかし、村営住宅はあるものの、民間アパートなどの独身を対象とした住まいはなく、村外からの通勤も困難な状況。また、親と同居する若者もいるが、いずれ結婚し別居することを想定し、独立して生活する経験を積むことなども大切であるため、村では独身者専用の住宅を建設することになった。

独身者住宅は平成9年3月に第1期分が完成。さらに、U・Iターン者が増加したことから、平成12年3月に第2期分が増築された。これまでの住宅利用者は86名。うち独身者住宅入居者同士で結婚した者が4組8名（Uターン3名、Iターン5名）、入居者以外と結婚した者が20名（Uターン7名、Iターン13名）おり、定住促進の大きな効果があったと言える<sup>21)</sup>。

そして、「定住住宅は若者たちの「たまり場」となり、村外出身の22歳の女性は「仲間がすぐできて地域に溶け込みやすかった」と話す。交流を深めた結果、入居者同士や住民との結婚が30人に迫り、今や「縁結び住宅」とも呼ばれている<sup>22)</sup>。

拙稿【2014】でも指摘したように、定住住宅は90年代に盛んに建てられたが、産業振興や雇用確保と同時に進めることが必要であり、さらに、定住人口の増につなげるためには、「定住者に対する住民の受け入れ環境の整備が課題になると考えられる」（100ページ）のである。

このほか、若者定住住宅から「卒業」するにあたっては、西米良村では2つの制度を用意している。住宅の新築に100万円助成する「マイホーム建設祝い金」、住宅の購入や取得に20万円を助成する「住宅取得祝い金」である。

子どもを出産しやすい環境づくりとしては、妊婦健診や妊婦の歯科健診、出産祝い金の支給などが、子どもを伸び伸びと育む環境づくりとしては、子ども医療費の助成、保育料の減免などのほか、教育関係の支援もある<sup>23)</sup>。

教育関連の施策について見ると、まず、村内には小中学校が1校しかないこともあり、4キロ以上の通学者にはバス代金が全額支給される。自転車等も距離に応じての支給がされる。修学旅行は、小学校が東京方面<sup>24)</sup>、中学校は姉妹都市提携をしている遠野市に行くが、小学校では5万5000円、中学校では7万円の補助がでる。

---

21) 中武【2014】

22) 西日本新聞2004年7月18日付。

23) 以下は、福祉健康課へのヒアリングによる。ヒアリングに応じていただいた中武かずみ、濱砂恵美両氏に、この場を借りて改めてお礼申しあげる。また、中武【2014】も参照。

また、村内には高校がなく、地理的に通学はほぼ不可能なので、下宿をする高校生が多い。そのため「支援手当」が月3万円支給される。高校生や大学生には、菊池奨学金からの貸付（月3万円）も行われ、村内の就業で返済が免除される。

特筆すべきは、「すくすく子育て支援金」であろう。これを使うと、村内での買い物価格の2割（上限）に充てることのできる「買物券」を月8000円分、未就学児を持つ子育て世代に交付している。西都市をはじめショッピングセンターに行くより自己負担額が低くなる。これもあって村には、ガソリンスタンドや電器店、食料品店があり、商工振興にもひと役かっている。

結果、村内に産婦人科も小児科もない（村立の診療所しかない）西米良村ではあるが、出生数は毎年2ケタであり（死亡が毎年20人程度なので人口総数は減少している）、合計特殊出生率も向上しているのである。

表6 出生数と合計特殊出生率の推移、出生時の母親の年齢

	出生数	合計特殊出生率	20-24歳	25-29歳	30-34歳	35-39歳	40-44歳
2002年	11	2.64	1	6	2	1	1
2003年	8	1.41	2	1	4	1	0
2004年	10	2.13	1	3	3	3	0
2005年	7	1.55	2	4	1	0	0
2006年	9	2.04	0	4	3	2	0
2007年	13	2.31	3	3	5	2	0
2008年	10	1.27	1	4	3	2	0
2009年	12	2.88	2	4	2	3	1
2010年	10	1.50	1	0	8	1	0

注：福祉健康課調べ。西米良村独自の試算。厚労省の人口動態統計（2008-2012年）による合計特殊出生率は、1.75だという。

出所：西米良村【2012】。

## 5. おがわ作小屋村の運営は集落で

本節では、村の東部にある小川地区に建てられ交流人口を拡大させている、おがわ作小屋村について見ていく。

「小川地区にはかつて藩侯の居候所があったところに郷土資料館と学習施設からなる小川城

- ✓ 24) 小学生は村からの補助をうけて修学旅行に行く一方、「生まれてから宮崎県から一步も出ていない」高齢者も多い。そこで、75歳以上の高齢者を対象に、「平成の江戸見物」も2012年度に引き続き2014年度も行った。財源は、村有林の伐採収益である。

址公園が整備されていたが」(略)「新しい総合計画では、小川地区を流れる小川川の流域にいくつかの民話が伝えられていたところから、民話の里「語り部の庄」として位置づけられ、学習施設は民話館に衣替えし、語り部を養成して活動を始め、それなりに利用者数も売り上げも増えてきた」<sup>25)</sup>。

その後、地区では、2000年5月から毎年「カリコボーズの山菜まつり」というイベントも行ってきた。初年度は2300人の人出で、初年度こそ役場職員の応援も借りたが、現在では地区の人々のみで準備し、来客者は1000人以上である。地形的にいても、小川地区に行くには国道から分かれている県道を蛇行しながら20分程度かかり、突然開けたところが小川集落である。集落の先には村所や竹原地区に抜ける林道があるので正確には行き止まりではないが、「ゆたーと」のような通過型の交流人口は期待できないものの、かえって、「桃源郷」らしい景観が残っている。

小川作小屋村運営協議会会長の上米良秀俊さんは、ヒアリングに応じて「小川地区には昭和には何百人も人がいて、小学校もあった。それが昭和の末には100人ほどになった。座して死を待つのでなく、何かやってつぶれればそれはそれでいいのではないかと、当時の組長がみんなをまとめた」とはじまりを説明してくれた<sup>26)</sup>。

まとめたといっても、最初は村からの提案である。奥が行き止まりであるなら、むしろ「平成の桃源郷」にふさわしい。そこで、地域の伝統的な生活文化である「作小屋」<sup>27)</sup>を活かした交流施設をつくるので、その運営を集落でできないか、というものであった。

2007年3月、小川地区住民代表及び西米良村役場小川地区担当班を中心に事業準備組織である「小川作小屋村設立準備委員会」が発足した<sup>28)</sup>。

準備委員会は、分野別に検討を進める3つの専門部会(組織形態、イベント・体験プログラムの内容を検討する総務企画専門部会、施設で提供する農産加工品やメニューを検討する商品生産加工専門部会、集落全体の景観づくりのための基本方針を検討する景観・施設専門部会)が設けられた。2009年までの2年間で96回開催され、部会ごとに、視察も行った。

農家レストランで提供する農産加工品については、すでに山菜まつりで地元食材を提供しているノウハウがあったとはいえ、毎日のことである。村内の旅館や食堂、宮崎市内のふるさと料理の店・杉の子の森松平さんのアドバイスをうけて料理を作ってみた。結果的に、16の小皿が並ぶ「四季御膳」が完成した。

運営に関わる人が、準備段階から知恵を絞ることは今でも続いている。13人のパートのお

---

25) 前田【2004】132ページ。

26) ヒアリングには、後述の上米良省吾事務局長も同席いただいた。この場をお借りして改めてお礼申し上げる。

27) 作小屋は集落から離れた山仕事や農作業のための宿泊可能な小屋。若夫婦が独立すると、親世代が作小屋に移住して、母屋を譲る。

28) 以下は、おがわ作小屋村を取り上げている農水省「日本食文化ナビ」ホームページも参考した。[http://www.maff.go.jp/j/study/syoku\\_vision/manual/pdf/txt\\_all.pdf](http://www.maff.go.jp/j/study/syoku_vision/manual/pdf/txt_all.pdf) 12ページ以降。

母さんがいるが、平均 73 歳。その中から 4 人のチーフがいて、事務局長と相談して月々の「四季午前」のメニューを決めている。4 人のチーフから、同僚のお母さんたちに、郷土の味つけが伝えられていく。

施設そのものは、過疎債等を原資に 1 億 3000 万円の建設費でもって村が建てた。そして、「小川作小屋村運営協議会」<sup>29)</sup>が発足し、「おがわ作小屋村」の指定管理者となった。運営協議会は、単に行政の下請けとして、おがわ作小屋村の管理運営を行っているわけではない。雇用の場の確保と若者の定住化を最終目標とし、以下の基本方針を掲げている。

- ・地域経営の拠点となるべく、地域の特性・資源を活用した商品等を開発・提供することとし、地域経済の活性化とともに地域の新たな雇用の場の創出を図り、早期の自立自走の施設運営を目指す。
- ・地域住民と協働し、身の丈にあった取組、イベント等を展開しながら、小川地区の魅力、資源を発信できる事業に取り組む。
- ・地域住民参加型のイベント等の展開や、将来を見通した景観づくり、景観保全に取り組み、既存施設の稼働率向上や交流人口の拡大を図る。

このように、おがわ作小屋村は、雇用の場であり、小川地区の魅力を発信し、交流人口の拡大をめざしている。実績を見てみよう（表 7）。

表 7 おがわ作小屋村の経営実績

単位：千円，人

	事業収入	税引き前利益	小川地区還元額	来客者（人）	職員（人）	従業員（人）
2009 年度	23,440	2,772	9,000	19,046	1	13
2010 年度	23,431	1,226	14,000	19,278	2	14
2011 年度	27,849	127	16,000	22,332	2	14
2012 年度	33,394	977	18,000	27,000	2	14
2013 年度	33,626	1,284	20,000	26,000	3	14
合計	141,740	6,386	77,000	113,656		

注：収入には、指定管理料 640 万円を含む。来客者数は、レジ客。

出所：小川作小屋村運営協議会資料。

食材は地元食材がほとんどなので、地元への還元率が高い。生産者の方から見ると、月 3～5 万円の収入になるようだ。ほかの地域の農産物直売所もそうだが、「孫にお小遣いがだせる」のが一番のたのしみであるそうである。

入込客は、マイカーをつかった個人客のほかに、観光バスも多い。「婦人会の口コミも大きい。どこかの婦人会を受けると、同じ市の婦人会が次々に来る」らしい。そして、若い女性や子ど

29) 協議会は現在 29 人で構成されており、組織としては公民館の外部組織として位置づけられている。公民館長、他役員 4 名のほか、各団体員（婦人会、青年会等）から選ばれた委員と、役場職員が 1 名である

もが来ることで地域に活気がでる。それだけではない。宿泊棟は、地元の人の利用もある。友達が来た、息子夫婦が来た、そんなときに泊まってもらうことができるようになったのだ。

作小屋村の準備の過程で、地区出身の上米良省吾さんがUターンしてきた（現在、運営協議会事務局長）。上米良省吾さんは、地元の出身であるが、村内に高校がなかったため西都市へ進学。そのまま就職した。古里を離れている間、高齢化は一段と進んだ。帰る場所がなくなるかもしれない、そんなときに、「作小屋村」の開設を知り、仕事を辞めて、妻と子ども1人を連れて戻ってきた。上米良省吾さんのようなUターンや移住者は、小川地区だけで14人に増えた。なお、2014年春に、上米良省吾さんの2人目の子どもが誕生している。

もちろん、課題もある。パートの従業員として働く女性は高齢化している。低力面での不安も大きい。そこで、集落に若者住宅、妻帯者住宅を建設中である。定住人口が増えるためには、安定的に雇用の場として確立することが必要であり、そのためには、交流人口の拡大は必要だ。道路を挟んで作小屋の対面の山を伐採、桜などの苗を植え「花見山」と名付けた。2月から6月までずっと花が咲く、秋には紅葉狩りもできる。

おがわ作小屋村は、若者の就業機会もひろげて、「雇用の場の確保と若者の定住化」の二兎を得ている。もっとも、上米良秀俊さんという。「面接でいいなと思う人も、ここで働くということはここに住むということであって、なかなか最後の決断をしてもらえない」。田舎に住む、働くという意味をもって来る若者でさえ、なかなかその一歩を踏み出すのは勇気が必要なのだそう。

## 6. 今後に向けて

「わくわくプラン」から展開してきた「米良の庄づくり」は、「ワーキングホリデー制度」を主軸とした「8つの庄建設プロジェクト」により、表8のように交流人口が拡大した成果をうんだ。2011年から10年計画で第5期長期計画が始まった。基本目標は「カリコボーズの休暇村・米良の庄－菊池の精神を受け継ぐ桃源郷－」。菊池の精神として郷土愛を、生涯現役として村民総参加を、平成の桃源郷として自立自走をむねとするものとなった。表3で見たように、第二の転換期を迎えている。もちろん、「わくわくプラン」のような大転換ではない。西米良村【2011】では、「村に刺激がもたらされ、村民が本村の魅力を再発見するきっかけを与えてくれました。これらの施策は、「米良の庄づくり」の土台であり、今後も継続していきたい施策です<sup>30)</sup>」としている。

どこを変えるのか。西米良村【2011】では、「しかしながら、導入から13年が経過し、村を取り巻く環境も大きく変化しました。そこで、「ワーキングホリデー制度」は継続しつつ、新

---

30) 西米良村【2011】103ページ。



表8 「米良の庄」交流人口の推移

単位：人

	94年度	97年度	00年度	03年度	06年度	09年度	10年度
計	6,599	21,207	150,281	126,373	114,029	127,349	125,879
作小屋村	2,523	4,411	7,103	6,084	4,535	19,046	19,278
ゆたーと	－	－	112,304	89,196	65,315	59,972	64,852
双子キャンプ村	4,076	3,610	5,877	5,272	4,700	4,852	4,642
湖の駅	－	13,186	24,997	25,821	17,704	17,313	15,989
百菜屋	－	－	－	－	21,775	26,166	21,118

注：総務企画課調べ。

出所：西米良村【2012】から作成。

たな交流策も展開していきます。また、「ワーキングホリデー制度」と並んで展開されてきた「8つの庄建設プロジェクト」も時代のニーズと本村の実態を熟考し、再構築を図り、さらに魅力と個性にあふれ、村民総参加の「米良の庄」をめざします」とされている。

具体的には、山村生活や体験や都市間交流を柱とする「交流体験の庄」、小川地区の花見山はじめ各地区の花を主体とした地域づくりやほおずきの「花の庄」、ゆたーとの充実と日常的な高齢者の健康管理の「健康づくりの庄」、郷土料理や糸巻大根などの特産品づくりの「郷味の庄」、語り部や山村文化・菊池精神の伝承としての「歴史文化の庄」、山の保全と山遊び「山遊びの庄」、一ツ瀬川の水質保全、川遊びの「川遊びの庄」、中心地の整備などの「街づくりの庄」を柱とする。要するに、ソフト事業を充実するのである。

「わくわくプラン」にせよ、4次長計にせよ、ハコモノ建設・整備が計画されてきた。それをなぜソフトに移行せざるをえないのか。西米良村【2011】では、「財源の約7割を地方交付税や国・県からの補助金、地方債等に依存しており、自主財源の中心となる村税については、公共事業の縮小や経済情勢により今後の増収は見込めない状況です」としたうえで、「国の予算措置や制度改正等の動向を見極め、これまでの枠組みや前例にとらわれることなく、村の実態を十分考慮しながら、実績にもとづく政策評価、事業の絞り込みを行うとともに、村民の視野に立った、真に必要な施策の展開を図ります<sup>31)</sup>」施設建設に比べればソフト事業はお金がかからないが、そのソフト事業も精選していこうというのだ。

村長の黒木定藏は言う。「財政運営の基本としては、施設建設をするにしても基金をためる。そうしないと硬直する。地方債現在高は、10年前の平成15年度末には26億円だったのが、25年度末には21億円まで下がっている。そのうち10億円は臨財債分である。積立金現在高は、25年度末で30億円。27年度に予定する庁舎建設に充てる」。結果、経常収支比率は73.0（平

31) 西米良村【2011】97～99ページ。

成 25 年度決算) で、県内の 17 町村の単純平均 83.1 と比べ 10 ポイント低い (16 位)。硬直しない財政運営を行ってきたからこそ、4 節で見たような、少子化対策のソフト事業が充実できるのだろう。

それでも、今後の国における予算等の状況は見通しがなかなか持てない。そのような中でも、雇用を柱にした定住人口の維持をすすめていかなければならない。

村では、機構改革を行い、村民課に定住推進対策室をおき、新たな取り組みが始まる。表 5 のように移住者はいるけれども、公務や「米良の庄」などの観光関連の就業者が多い。もともと公共事業 (建設業) も大きくはなかった。観光でも、旅館や民宿には後継者が少なく、新規就農支援策は国に準拠しているが、農業や商店にも後継者が少ない。

定住住宅も新設が難しく、既存の家屋の利活用がカギとなっている。2006 年に空き家状況のための予備調査を行い、37 件の空き家のうち 20 件は使用可能だったようだ。ほかの地域でもそうだが、権利者が都会にいて、盆や正月、墓参り等で利用はしているので、簡単に他人に貸すまでには至っていない。移住・定住推進のために空き家登録制度をつくり、4 件の登録があるという。また移住を目的とした 2 泊 3 日のお試し短期滞在期間中の宿泊費の一部を支援する制度を 2014 年 9 月議会で補正予算として実施されることになった。

第 5 次長期総合計画では、その「基本目標には、前計画の目指した「定住条件の整備、交流人口の促進、菊池の精神の継承」に、そこに住む人・訪れる人すべての心を豊かにし、生き生きと元気な郷である『桃源郷』を加え『『カリコボーズの休暇村・米良の庄』 - 菊池の精神を受け継ぐ桃源郷 -』としました。「人が何によって心豊かと感じるのか」。幸せ感はみんな違いますし、違っていいのです。住む人と訪れる人の両方が、とりわけ「村民が明るく元気で「生」を楽しめる<sup>32)</sup>」西米良版の「平成の桃源郷」に期待するものである。

## おわりに

本稿では、「消滅自治体」とされるなかでも、10 年以上にわたり地域振興と人口対策を行ってきた宮崎県西米良村を事例に、雇用確保を含んだ定住政策の視点から行われた行政の取り組みについて成果と課題を考えてきた。

西米良村の村づくりの取組みの特徴は、3 点あげられると考えられる。

1 つ目は、集落の力である。「8 つの庄プロジェクト」やおがわ作小屋村では、集落に計画の具体化や運営をまかせている。上米良地区では、これまでの廃校をいかした交流施設である「米良の里」の取組みに加え、ジビエ (野生動物の肉の加工品) を特産品とする取組みがはじまっている。

---

32) 西米良村【2011】26 ページ。

2つ目は、村の支援の仕方である。おがわ作小屋村にしても、川の駅「百葉屋」にしても、ハコモノは村がつくっている。その後の運営を、住民等にまかせることで財政負担をより少なくしている。

最後は、村民の力である。たとえば「ゆたーと」の清掃を行う朝・夕風呂会。おがわ作小屋村にしても、かや葺き屋根の材料となるかやは集落の人間が刈って用意したという<sup>33)</sup>。小川地区だけではなく「語り部」が組織され、「ゆたーと」で定例の発表会があったりもする。小中学校合同運動会は、地区別対抗戦の様相も呈し、メラリンピックとよばれ、村民の半数以上の600人が集まるという。「てごり」という助け合いの伝統もある。

西米良村の今後の課題は、なんといっても人口動態である。子どもが一定数いるとはいえ、人口減少傾向は西米良村を今後も直撃するだろう。毎週どこかの集落でイベントを行っているわけだし、1人が何役も兼ねており（準備や打ち上げ会をはじめ、交流が濃い側面もある）、「疲れ」もあるだろう。「わくわくプラン」のときには60歳であった人も現在は75歳になってしまっている。Iターン者に話を聞いたところ、「実働人数が少ない」ことが悩みだという。

人口の中でも、いわゆる現役層を増やすためにも、地域経済の振興が求められる。おがわ作小屋村や百葉屋で働いている主力は高齢者であり、年金受給者で農業との兼業でもあるので、月3万円のおこづかいでも満足できる。それをどう現役層の雇用につなげていくのか。もっともこのことは、西米良村だけの課題ではなく、全国的な課題でもある。

西米良村の取組みを支えてきた集落の力や村民の力といっても一朝一夕にできあがるものではない。昭和の時代は栄えていた林業からしいたげや柚子に、平成になっても花卉が難しければカラーピーマンに主力作品を変更してきたという柔軟性も、「逆境に耐え、忍耐強く、初心を貫く」菊池の精神があるのだろう。

※ 今回の西米良村ヒアリングは、2014年9月に行った。引き受けをコーディネートいただいた村民課定住推進対策室長牧幸洋氏に、この場を借りてお礼申しあげる。

※ 本稿は、平成26年度和歌山大学独創的研究支援プロジェクト「エリアマネジメント組織との連携による実践型まちづくりに関する研究」の成果の一部である。

#### <参考文献>

- 岡崎京子ほか【2004】「Uターン者増加の過程における転入要因の変遷～宮崎県西米良村を事例として～」『日本建築学会大会学術講演梗概集』2004年8月。
- 田島康弘【2005】「新しいツーリズムによる地域振興」『鹿児島大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編』第56巻。
- 田爪竜治【2007】「都市との交流深める西米良型ワーキングホリデー制度」『地域づくり』2007年4月号。
- 中島正博【2014】「島根県海士町の取組みから見た定住政策の課題」『経済理論』376号、2014年。

33) 西日本新聞 2004年7月16日付け。

- 中武かずみ【2014】「若者の定住促進に向け独身者専用住宅－西米良村，結婚や子育て支援も充実－」『地域づくり』2014年1月号。
- 『西日本新聞』2004年7月15日～7月19日連載「こんにちは！あかちゃん第19部 自治体の役回り 西米良の挑戦」。
- 西米良村【1973】『長期総合計画』。
- 西米良村【1982】『第二次西米良村長期総合計画 - 山と川の幸，満ち溢れる西米良村』。
- 西米良村【1991】『第三次長期総合計画』。
- 西米良村【1996】『第三次西米良村長期総合計画（見直し）九州中央山地・一ツ瀬川源流 生涯現役元気村 カリコボーズの休暇村・米良の庄わくわくプラン』。
- 西米良村【2001】『第四次西米良村長期総合計画』。
- 西米良村【2011】『第五次西米良村長期総合計画』。
- 西米良村【2012】『西米良村勢要覧－資料編－』。
- 農水省「日本食文化ナビ」[http://www.maff.go.jp/j/study/syoku\\_vision/manual/pdf/txt\\_all.pdf](http://www.maff.go.jp/j/study/syoku_vision/manual/pdf/txt_all.pdf)
- 本田佳奈【2008】「研究ノート・西米良村の山で働く人々と狩りの記録」神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議『非文字資料研究の可能性－若手研究者成果論文集』（[http://www.himoji.jp/jp/publication/pdf/seika/801\\_01/02-165-218.pdf](http://www.himoji.jp/jp/publication/pdf/seika/801_01/02-165-218.pdf)）
- 前田豪【2004】『西米良村の挑戦』鉾脈社。

## Depopulation Countermeasures in Nishimera Village, Miyazaki Prefecture: Success and Issues

Masahiro NAKAJIMA

### Abstract

This paper is based on a case study of Nishimera village in Miyazaki Prefecture, where regional promotion and depopulation countermeasures have been conducted for more than 10 years. It considers the success of these measures and issues that have arisen. Nishimera's efforts have been characterized by the strengths of the settlement and the people, as well as the methods for supporting the village, and this had led to success. Further regional economic revitalization that will bring employment is required in future.